
世界經濟の構造と展開

有賀 定彦 編著
都野 尚典



ミネルヴァ書房

世界経済の構造と展開

1979年4月15日 第1版第1刷発行
1980年3月15日 第1版第2刷発行

<検印廃止>

定価 2000円

編著者 有 都 賀 野 定 彦
 杉 田 尚 典
発行者 杉 田 信 夫
印刷者 江 戸 卯 一 郎

発行所 株式 ミネルヴァ書房

607 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
電話 (075)581-5 1 9 1番(代表)
振替口座・京 都 8 0 7 6 番

©有賀・都野, 1979.

共同印刷工業・新生製本

3033-43031-8028

Printed in Japan

は し が き

現代の世界経済の動きは、複雑で目まぐるしい。本書は、この複雑な世界経済の動きの底を流れる法則がなにかありはしないか、という共通の問題意識をもって編まれたものである。

こういった問題意識からするならば、まず問題になるのは、現代を資本主義の歩みのなかでどのように位置づけるかということである。執筆者にはぼく共通しているのは、現代の資本主義をレーニン段階と異なる一つの新しい段階ととらえることである。そうであるとするならば、現代の世界経済は、一九世紀中葉のマルクス段階や二〇世紀初頭のレーニン段階とどのようなつながりを持ち、またどのように異なっているかという連続と非連続の問題が生じてくる。第一編「世界経済の論理と歴史」は、この課題への取り組みである。

第一章「世界資本主義の存立構造と運動」(有賀)は、一九世紀中葉に形成されたイギリス中心の世界市場を、現代の資本主義世界経済の原型としてとらえ、そこでの存立構造と運動をマルクスの『資本論』や「経済学批判体系プラン」を手がかりにとりくみ、第二章「帝国主義と第二次大戦」(都野)で、一九世紀中葉の世界市場から第二次大戦にいたるまでの世界経済の歩みを、レーニン『帝国主義論』の論理をよりどころに歴史的に考察した。

第二編「現代世界経済の諸範疇」は、一九六〇年前後に定着した現代の世界経済の編成をなす諸範疇をとりあげ、現代の世界経済の存立構造と運動の展開を考察した。第三章「戦後体制の枠組」(都野)で、第二次大戦後、まず形成されたアメリカ体制の検討ののち、第四章から第一〇章まで、それぞれの分野で作業を行なった。

第四章「IMF体制」(田中)は、IMF体制の成立から固定相場制の崩壊までを主題とした。ここで残念なのは、「国家独占資本主義と経済成長」という一章を設けて現代資本主義の指針をなすケインズ理論の検討を行うことにしていたが、担当者の慎重な研究姿勢から本書に載せるにいたらなかった。第五章「戦後の世界貿易」(柳田)は、貿易分析の新しい手法を生かそうとする試みであった。第六章「現代帝国主義と経済統合」(有賀)では、現代とレニン段階と異なる点をこの問題にも見出そうとした。第七章「多国籍企業」(久保田)は、多国籍企業の実態解明に焦点をおいた。第八章「南北問題」(吾郷)と第九章「エネルギー・食糧問題」(吾郷)では、担当分野をつうじて「現代」を考える問題提起をなした。そして、第一〇章「インフレーションと国際収支」(前田)は、資本の蓄積運動の視座からこの課題にとりくんだ。

このような各分野での作業を、第三編でまとめるうえで、「世界資本主義の循環と危機」という章も予定していたが、割愛せざるをえない事情が生じたため、編名も当初予定していたものを本書のように変更して、第一章「資本主義と社会主義」(有賀)をこれにあてた。なお、読者の便宜のため、巻末に第二次大戦後に焦点をおいた「世界経済年表」(有賀)を付した。

ミネルヴァ書房の高橋邦太郎氏のおすすめで、本書を思いついたのは三年前の春であった。何度か研究会を開き、合宿を行なった。湯煙たつ雲仙の山あいでの語らいは、お互いの研究にもまして心の糧となった。共通の目標をもちながらも、それぞれ主張を異にする人々が、どのように一緒に作業をしたらよいか、という課題を、狭い世界ではあったが実現に努めた。

本書を執筆するにあたって、編者は、それぞれの担当分野で、一般的な概説をなしながら、なにか新しいものを打ちだすこと、しかも平易な文章でのびのび書くことを各執筆者に望んだ。だが、本書ができあがってみて、編者

もふくめて、この願いの実現に今後も努力したいと思う。

研究会を重ねるごとに痛感したことは、資本主義の分析もさることながら、どうしたら現在のカオスの状況から脱却できるのか、ということであった。各執筆者の異見は、ここで統出した。ただ特定の社会主義国の欠陥を指摘するだけでは問題の解決にはならず、これまでの社会主義の論理と歴史にたいして、科学的にとりくんで理論を構築し、未来を追求することが必要であろう。こういった問題もふくめて、これを機会にさらに共同研究を進めたいと思う。読者の本書にたいするきびしいご批判をお願いする。

本書がこのような形でできあがったのは、ひとえにミネルヴァ書房の高橋邦太郎氏の御寛容と励しによる。ここに心から御礼申し上げる。

一九七九年三月三日

編 者

目次

まえがき

第一編 世界経済の論理と歴史

第一章 世界資本主義の存立構造と運動……………三

第一節 経済学の対象と方法……………三

第二節 市民社会と国家……………八

第三節 外国貿易と世界市場……………二四

第四節 原理・原型・段階……………二九

第二章 帝国主義と第二次大戦……………三二

第一節 世界体制としての帝国主義……………三二

第二節 帝国主義の運動と形態……………三九

第三節 帝国主義の矛盾と第二次大戦……………四〇

第二編 現代世界経済の諸範疇

第三章 戦後体制の枠組……………四七

第一節 戦後体制の形成……………四七

第二節	戦後体制の展開……………	三三
第四章	I M F 体制……………	三六
	——成立・発展・崩壊——	
第一節	I M F体制の成立……………	三六
第二節	I M F体制の発展(一)……………	三六
	——ドル不足の時期——	
第三節	I M F体制の発展(二)……………	三七
	——ドル危機の時期——	
第四節	世界資本主義の危機とI M F体制……………	三九
第五章	戦後の世界貿易……………	三八
第一節	国際間の不均等発展と貿易……………	三八
第二節	後進国の側からする現行世界経済体制変革の契機……………	三九
第三節	社会主義国の貿易の動向……………	四六
第四節	世界経済の多元化……………	一〇三
第六章	現代帝国主義と経済統合……………	一〇五
第一節	レーニン『帝国主義論』と現代……………	一〇五
第二節	先進国の経済統合——EEC……………	一〇七
第三節	後進国の経済統合——ASEAN……………	一二三
第七章	多国籍企業……………	一二五
第一節	戦後資本主義の発展と多国籍企業……………	一二五

第二節	多国籍企業と直接投資	二九
第三節	多国籍企業の規制への動向	三三
第四節	企業の国際化現象	三四
第八章	南北問題	一三〇
第一節	「南北問題」とは何か	一三〇
第二節	資本主義と△低開発▽ ——方法の問題——	一四三
第三節	国連貿易開発会議の成立と展開 ——サテライトによるメトロポリス体制批判——	一四七
第四節	「新国際経済秩序」 ——体制が問われている——	一五二
第九章	エネルギー・食糧問題	一六二
第一節	エネルギー問題の構造	一六二
第二節	△石油文明▽と地球生態学 ——エネルギー過剰消費の意味するもの——	一七二
第三節	「肉食」と「分業」の思想 ——食糧問題の意味するもの——	一七六
第一〇章	インフレーションと国際収支	一八三
第一節	インフレーションと経済成長 ——国民経済的規模でのインフレーション——	一八四
第二節	インフレーション発生の基盤	一九〇

第三節 国際収支と再生産・資本蓄積……………	一五九
第四節 世界インフレーションと現代資本主義……………	二〇一
第三編 資本主義と社会主義	
第一章 資本主義と社会主義……………	二〇七
第一節 資本主義の新しい段階としての現代資本主義……………	二〇七
第二節 「全般的危機論」の再検討……………	二二七
第三節 世界史的課題としての「近代化」の超克……………	二三三
付録 世界経済年表……………	

第一編 世界經濟の論理と歴史

第一章 世界資本主義の存立構造と運動

第一節 経済学の対象と方法

これまでのマルクス経済学にあつては、「経済学の対象」には「プラン問題」を、そして「経済学の方法」には、「下向・上向」の方法をとりあげ、「経済学の体系」を構築しようとするのが、伝統的な通説であつた。そこで、「資本・土地所有・賃労働、国家・外国貿易・世界市場」(『経済学批判』序言)という「順序」をどのように「上向」して体系化するか、ということに多大の努力がはられてきた。この作業での困難な点は、一つは「歴史的なもの」をどのように論理のなかにくみ入れるか、ということであつた。それは、非資本主義を資本主義の論理のなかにどのように位置づけるかということであり、また資本主義の運動をどのようなものとしてとらえ、歴史の必然性を科学的に証明できるかどうかということであつた。もう一つの難点は、「資本」から「世界市場」までを一貫した体系としてとらえる場合、「資本・土地所有・賃労働」という「前半」と、「国家・外国貿易・世界市場」という「後半」との接点として、「国家」範疇をどのような内容のものとして理解するかということであつた。⁽¹⁾

だが、こういった作業そのものが、「経済学の方法」から無理があるとして、独自の理論体系をたてるのが「宇野理論」である。原理論・段階論・現状分析の三段階論がこれである。商品経済を経済学の対象とし、純粹資本主

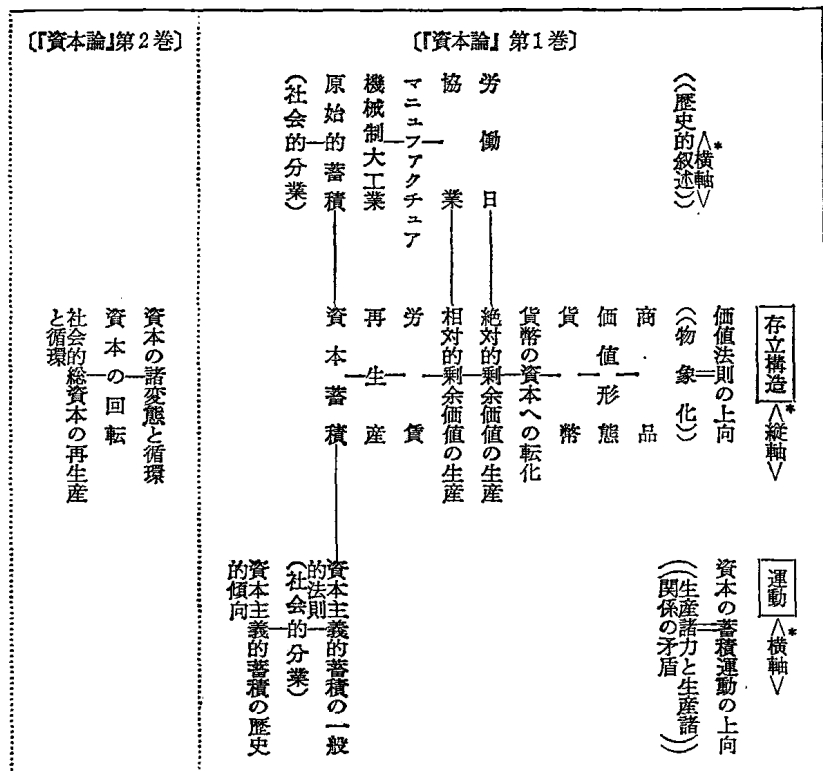
義を想定して、資本家的商品経済を支配する法則と特有な機構とを明らかにするのが経済学の原理論であった。したがって、「歴史的なもの」「非資本主義」は原理論の対象外とされ、「国家・外国貿易・世界市場」の「後半体系」は、段階論でとりあつかわれることとなる。しかも宇野理論にあっては、法則を「たえずくり返す」ものであり、自己完結的な循環運動として把握するため、資本主義の運動から「生成」と「死滅」とがとりのぞかれるし、ある段階から他の段階への移行を内的論理的に説明することができなくなる。⁽²⁾ このような「宇野理論」にたいして、これまで数多くの批判がなされてきているものの、⁽³⁾「経済学の方法」に関して、伝統的なマルクス経済学のいわば通説にも、欠陥があったのではなからうか。

「経済学の方法」としての「下向・上向」の方法は、『経済学批判への序説』をよりどころにする。それは、表象された具体的なものから、だんだん稀薄になる抽象的なものに進んでいって、ついには最も簡単な諸規定に到達する。そこで、こんどはそこからふたたびあともどりの旅を始めて、最後に多くの規定と関係とをふくむ一つの豊かな総体としての具体的なものに到達する、という方法である。第一の道では、充実した表象が蒸発させられて抽象的な規定にされた。第二の道では、抽象的な諸規定が、思考の道を通って、具体的なもの再生産になってゆく。そして、このあとの方のやり方(第二の道)が、科学的に正しい方法であるとする。⁽⁴⁾そこで、この上向法による「経済学の体系」としての諸範疇の順序は、「それらが近代ブルジョア社会で互いにもっている関係によって規定されているのであって、……問題は、近代ブルジョア社会のなかでのこれら諸関係の編制なのである」。⁽⁵⁾しかも、この方法は、商品経済の作用による資本主義の「物象化」の重層構造を解明する論理の上向法である。したがって、物象化された範疇を無批判的に経済学の体系とする俗流経済学にたいして、みずからの理論を科学として対決させるため、マルクスはわざわざ「批判」という言葉をつけ加えて「経済学批判体系」といったのである。⁽⁶⁾そして、こ

のような意味において、資本主義の存立構造をときあかす「市民社会の解剖学⁽⁷⁾」として、資本にはじまり世界市場で終る経済学の体系が構想されたのである。

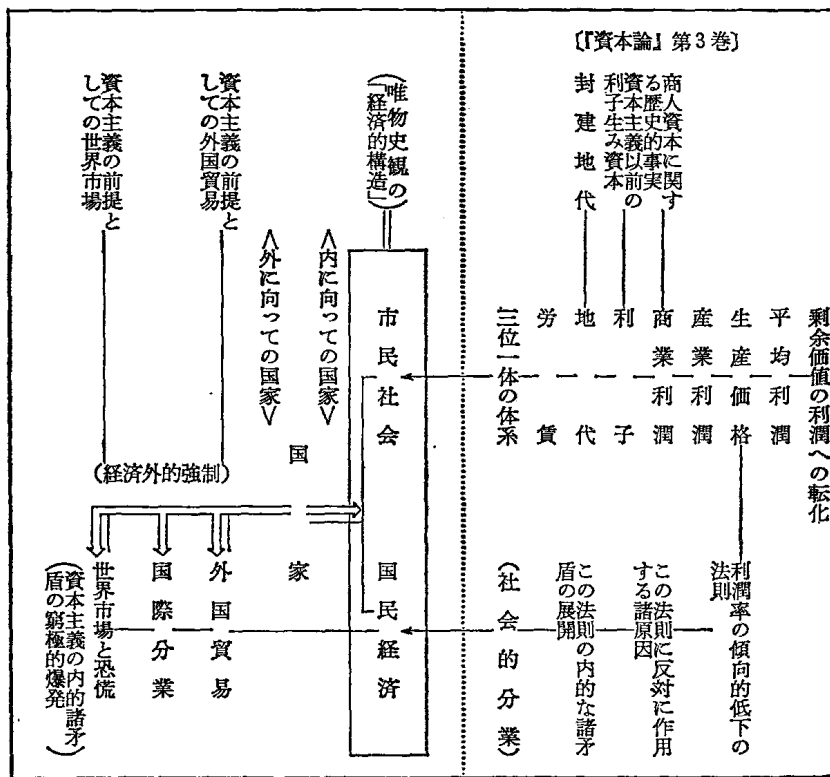
資本主義は、商品経済社会であるとともに資本と賃労働という生産関係Ⅱ階級関係をもつ。剰余価値の追求が、資本蓄積の運動をかりたて、たえず生産力を発展せしめながら、生産諸関係との矛盾・衝突を生みだしてゆく。それは、資本主義の自己運動にはかならない。したがって、「経済学の方法」には、資本主義の「運動」をときあかす「方法」がもう一つ必要である。エンゲルスの『反デューリング論』第二編「経済学」一「対象と方法」は、「生産諸力と生産諸関係の矛盾」に力点をおき、弁証法にもとづく歴史科学としての経済学を力説する⁽⁸⁾。またマルクスにしても、『資本論』第一版の序文で、「近代社会の経済的運動法則を明らかにすること」が最終目的である⁽⁹⁾という。問題は「運動法則」のとらえ方にある。これをただ商品経済にのみ限定して、「たえずくり返す」ものとしてとらえるのではなく、「たえずくり返し」ながらも、「破局」を生みだし、ある段階からより高次の段階への「連続」と「非連続」、ある一つの社会から他の社会への「死滅」と「生成」を弁証法的に把握しようところに、マルクス主義のマルクス主義たる所以がある。すなわち、この系譜の「経済学の方法」は、「資本主義の生理学としての経済学」であって、それは資本の蓄積運動を主軸に展開される。いわゆる「生産諸力と生産諸関係の矛盾」の論理はこの線上にある。

「物的依存関係」の資本主義社会にあつては、「人的依存関係」の前資本主義社会にくらべて、商品経済の作用によって、日常生活の場である市民社会においては、階級関係は人々の目に見えず、人々は「市民」として、みな自由であり平等であるという「物象化」の姿をとる。そして、資本主義が自己運動の結果として生みだした「破局」において、この「物象化」は破壊され、「富める者と貧しき者」の階級関係は、だれの目にもはっきり見える



姿をとる。つまり、資本主義の物象化の存立構造は、資本主義の運動の結果としての破局において白日の下にさらしだされることとなり、資本主義は破局をつうじて「変革」か「再編成」かのいずれかの途の選択を迫られてきた。それでは、経済学の対象となる資本主義はどのような資本主義であるのか。マルクスは、『資本論』の叙述内容を、「資本主義的生産様式の内的編成を、いわばその理想的平均において、示しさえすればよい」とのべる。だが、この「理想的平均」は「純粹資本主義」を意味しない。「経済学批判体系」のなかの「資本」の、しかもそのなかでの「資本一般」にすぎない『資本論』においても、「歴史的叙述」は全三巻の各所でみられ、理論の上向と歴史的

表 1-1 資本主義の



* 縦軸と横軸は印刷の都合で逆になっている。

叙述との織りまぜた構成になっている。そこにおける歴史的叙述は、けっして『資本論』の「付録」ではなからう。マルクス経済学では、「範疇」のとりえ方が俗流経済学のそれとことなるのではなからうか。つまり、「抽象から具体へ」、「単純から複雑へ」といった「範疇」の論理的上向とともに、「範疇」それ自体の歴史的考察と運動の必然性が構想されるのではなからうか。つまり、資本主義を研究対象とする経済学の体系は、資本主義の存立構造をと き明かす縦軸としての物象化の上向論理Ⅱ重層論理（価値法則の上向論理）と資本主義の運動を解明する生産力の発展、ならびに生産諸力と生産諸関係の矛盾の上向論理Ⅱ累積論理が、資本に始まり世界市場にいたる体系の